『アラスカ・四半世紀の時を越えて』
１９６８年カナダ・ユーコン学術登山隊

井上　達男

“a quarter century”

思い出の地に家族と

“a quarter century” アンカレッジの空港から通関を済ませて手配したレンタカーの迎えがやって来るまでの間、北国の淡い澄み切った大空に目を向けて胸一杯に大気を吸い込んでいるとしきりにこの言葉が浮かんで来る。Turnagain Arm の入り江を渡り、街並を覆う落葉樹の梢を揺らし来る風は心地好く少し暑さも感じる程だ。街の向こうの山々は残雪が乏しく、カールにも白いものは見当たらない。今は夏の盛りだ。

１９９３年８月、結婚当時の約束を果たすべく家族でアラスカにやってきた。中学２年の娘と小学６年の息子、そして妻の四人でこれから１週間のアラスカのドライブを楽しもうとしている。１９６８年の遠征以来、丁度四半世紀ぶりの訪問である。

あの遠征以来、永くアラスカの地を訪れることはなかったが、ヨーロッパへの出張で給油のためにアンカレッジの空港に一時下り立つことが度々あった。真冬の零下２５度、澄み切った大気と純白の Mt. McKinley。離陸した飛行機が高度を上げるに従って益々高くなる様。氷結した Yukon River の幾重にも織り成す銀色の緩やかなながれの縞模様。ジェットの窓から眺めてただ吐息を漏らすのみであった。

アラスカの旅はモーターホームで

さて、我が家の旅は Motor-Home のレンタルから始まった。幸い、レンタカー会社のオーナー御令室が直々に我が家が借用しようとしているキャンピング・カーで空港に出迎えてくれた。アメリカ人の多くは、１ケ月以上の休みを取って“Motor-Home”でアラスカを一周することを夢にしているそうだ。Motor-Home は名前の通り、キャンピングカーを超えて、「動く家」である。我が家の借りたものはクラス“A”で、２ダブルベット、キッチン、バス・トイレ、ダイニング、冷蔵庫、電子レンジまで付いていた。山に行く時の習慣で石油コンロからコッファーまで、一式用意してきたのだが、ほとんど使う機会はなかった。

今回の旅の目的は、まず Yukon River に到達すること。次は氷河を踏むこと。川で鮭を釣ること。とにかく小さくてもピークに全員で立つこと。そして出来るだけ多くの野生動物と遭遇すること、と盛沢山だった。長女が生まれたとき、ユーコン川をイメージして、裕子と名付けた。それでここには第一目標としてどうしてもやって来なければならなかった。行く先々のオートキャンプ場ですばやく食事やキャンプが出来、真夏の沈まぬ太陽を利用して、午後１０時頃までドライブを続ける毎日だった。Mt. McKinley National Park、Fairbanks、Circle(Yukon)、Alaska Range、Glennallen、Matanuska Glacier、Portage Glacier と周って、合計２２００ｋｍの旅だった。

アプローチは船が一番

jet-lug、USA 出張の億劫なものの一番がこれだ。つい先日も名古屋からシカゴに入った。猛暑におよそ６００人もの死者が出た直後の渡米だった。日本から出発するとその日の朝到着する。いきなり異文化の中に入り、時差ぼけに襲われるわけだが、スポーツをするのが一番いいようだ。シカゴにはゴルフ場がたくさんあるので思い切っ

て安い料金でコースを一回りしてその晩はぐっすり眠れば時差調整が完了する。幸い風が出て、極端な暑さは通りすぎていたので夕暮れまでゆっくりゴルフを楽しむ事が出来た。自分の会社の事務所が米国のあちこちにあり、ちょっと北海道に出張する感覚で渡米することが多い現在である。２５年前、船で初めての異国、アメリカ大陸に上陸したなど、まるで２５０年前の出来事であったのではないかと、これは記録をつけると言うより、歴史を繙く感じだ。

東京の晴海埠頭から出発したランゲル丸は一路太平洋を北上し、日付変更線のお祭りなどを楽しみ、アリューシャン列島からアラスカ湾を横断して東南アラスカのランゲルに入港した。８日間の航海の後に初めて見る異国、アメリカ大陸を見た２０歳の青年の心は、今思い出してみると自分の事ではないように思う。早朝からデッキに立って、だんだん、だんだん大きくなってくる陸地を真正面に据えて、未知への好奇心を大いに奮い立たせたものだった。中園さん、坂西さんと三人で乗り込んだ船旅だった。航海士の船室を与えられ、読書と花札、英会話の練習、船長や機関長との談笑など、船旅ならではのゆとりある旅路であった。

Denali National Park

１９９３年８月１５日、我が家はアンカレッジからDenali National Parkへ。ここで時間があれば２５年前に訪れたWander Lakeまで入りたかった。しかし、許可をもらい、バスで入るには最低３日必要なので、急ぎ旅の今回は、Savage Riverまで車で入ってMt. McKinleyの氷河のある前山を眺めるに留めた。しかし、Georges Park Highwayでは巨大なムースを目前で観察したし、 Savage RiverのAlpine Tundraでは、かわいいArctic Ground Squirrel（地リス）にも出会った。道すがらブルーベリーをむさぼり食ったのも２５年前と何も変わりはなかった。ただ、今は妻と子供達がいっしょにはしゃいでいる。アラスカの自然に身を任せているとだんだん当時の思い出がよみがえって来る。

１９６８年８月３日、中西先生以下、総勢７人はFairnanksからAlaska RailwayにてDenali National Parkに入った。公園入り口の“Morino Camp Ground”にテントを張った。その夕方、公園管理事務所でスライドを使ってこれから訪れるDenaliの自然の紹介と公園内での行動の注意を受けた。翌日から８月７日、Faibanksに戻るまでの三日間、Mt. SteeleとMt. Walshの登頂にも成功した遠征隊は本当にゆったりした気分でWander Lakeのほとりのキャンプ生活を楽しんだ。

増田さんがtundraの苔のマットに腰掛けて、静かに笛を吹いている。その背後の丘を沈み行く太陽で黄金色に染まったMt. McKinleyのDenali Wallを背にしたトナカイが角をくっきりとシルエットにしてゆったりと進んでゆく様子などは有名な映画の一シーンの如くa quarter century ago とは思われぬ昨日のことのように思い出されて来る。ああ、笛を吹けるといいな、と思いつつも今日まで練習が出来ずにいる。我が家で子供達がフルートを習いだし、いつしかこの夢は彼らの演奏を山頂や大自然の中で聴くことに変わってしまった。

坂本さん、増田さんが釣りに出かけ、中園さん、坂西さんとtundraの散歩に出かけた。ハリネズミに出会った。逃げないのだか写真を撮ろうとして前に廻ろうとしても必ず背中のハリをこちらに向けてうずくまり、身を守ろうとする。やがてきれいな流れに出会ったら、たくさんのグレーリングが深みに姿を見せている。釣り竿を持ってって来なかったのをくやんだか始まらない。結局、ジャブジャブと川の中に入って、

手摑みで十数匹を採り木の枝に刺して持ち帰った。これもアラスカならではの出来事であろう。

中西先生にとっては、むしろ、氷河の山中が、休業で、ひたすら登頂成功と我々の安全を念じていられたことであろう。下山後は、専門の植物学の field として、Denali National Park は忙しく仕事をする場となっていた。あちこちの池塘で標本の採集をされたり、我々素人に熱心に植物の名前を教えてくださった。

「神戸大学カナダ・ユーコン学術登山隊」の実現へ

遭難に学ぶもの

昭和４０年（１９６５年）３月、合格発表に浮かれて「よし、山岳部に入るぞ」と親に宣言した矢先のことである。新聞に「神戸大学山岳部、槍ヶ岳で遭難」と出た。高校時代に仲間と岩登りに興じたり、雪山をスキーで駆け巡ったりしていたので、山岳部の扉を叩くことに何の躊躇もなかったが、さすがにこのタイミングでの石川さんの遭難は登山の危険というものを乗っけから強烈に思い知らされた。「孤高の人」の加藤文太郎の遭難や、小説「氷壁」でザイルの切断、転落死等、既に知識として知っていたが、現実にこれから参加しようとしているクラブでの遭難は、簡単に割り切れるものではなかった。入学手続きの日にそのまま六甲台の部室に上がると、既に小林広夫が入部を希望してやってきていた。それに勇気づけられて即座に入部してしまった。当時のリーダーシップを取っておられた鶴谷さんらにはきっと、この時期に入って来るのはよほどの覚悟か、バカと映ったのではないだろうか。しかし、山登りの知識と技術を学んだり、山行の楽しみを覚える前に、絶対に避けては通れない山の遭難について徹底的に分析、回避するあらゆる方策について学びとる実に効果的な体験を入部当初からさせてもらったのは貴重だった。

石川さんの遭難の反省から、「登山学校方式」、「オールラウンドでコンプリートな山行」、合宿に明け暮れるだけでなく、個人の自主的計画を生かした「自由山行」などが語られ、議論され、遭難を二度と起こさない覚悟での再出発がなされた。新人山行は氷ノ山ヒュッテの改修と、美濃の冠山の藪漕ぎだった。しかし、私の心には、大学山岳部に入る大きな目的、でっかい夢の実現、すなわち「ヒマラヤの処女峰の登頂」が常に暖められていた。８０００m峰は全て登られ、７０００m級の処女峰か、８０００mの前衛峰とバリエーションルートが標的となる時代だった。次々にヒマラヤで処女峰が陥落し、街の山岳会の若者達には、力を試す機会が国内の壁の新ルートやヨーロッパアルプスのバリエーションルートの開拓に見出されていたので、「藪山から」の発想には、正直言って時代錯誤的な批判を加えたい気持ちで一杯だった。もし仮に、当時有名だった街の山岳会に所属し、センセーショナルな登攀に突き進んでいたならば、今日の自分は有り得ない。また違った人生が待っていたことだと思う。

しかし、一歩一歩着実に歩む山岳部の伝統の中で育ち、山と人との出会い、仲間との絆、困難や未知の探求を通じて得た問題解決能力等、自分の中の上質なあらゆるものを造りあげてもらったことで今は選んだ道に満足している。もちろん、西村先生、中西先生に加え平井先生と素晴らしき指導者に恵まれ、活発な緒先輩の導きがあってこそのことである。何事にもラジカルに、ちょっとへそ曲がりに反応する、危なっかしい人物を何とか社会人として通用するように鍛えなおしてくれたのも、神戸大学山岳部であったように思う。うまきクライマーである前に良き社会人であらねばならな

いことを教えられた。

その頃、ネパールは登山鎖国政策が取られていたし、紛争の勃発していたカラコルムへも入れない状況で、登山界の目がアラスカに向けられた時期であった。当時、国威寮の傍にグリーンハウスというバンガロー風の下宿があり、増田さんと中村さんが住んでいて、ここでAlaskaの計画が生まれた。そうこうしている内に、田中薫先生の関係で、アラスカパルプの用船を使って渡米できるチャンスが到来した。

計画のチェックをしていただく会合が、六甲台で開かれ、円満字さんから、「君達はピッケルとアイゼン、ザイルを繋いで氷河を歩く技術を身に付けているのかね。」と、未経験者による氷河の歩行の危険性を指摘いただいた。行ったことの無い者に経験がないとだめだ、と言われたら、決して行くことが出来ない。「そんなら、いっしょに行って教えてちょうだい。」と心の中で思ったものだが、最年少の私故、じっと下を向いて黙っていた。実際、Mt.Steeleの前衛峰、円山ピークのhiden　crevasseに落ちた瞬間、油断でザイルを結んでいなかったが、経験のなさと、氷河の恐さを思い知った。幸い、クレバスは深くはなく、落ちた雪がクサビとなって、２m程度の落下で止まってしまった。坂西さんと下降中だったが、新雪が１m近く積もった直後で、その時既に氷河生活３週間を経過しており，氷河の上に積もった雪の微妙な陰影から、風紋とヒドン・クレバスの違いを確実に見分けられる様になったいた矢先の出来事だった。この経験はカラコルムに生かされた。雪を被った氷河のアンザイレンは必須である。決してこの原則は破らせなかった。おかげで、命拾いした隊員が何人かいる。きっと思い出されることだろう。

さて、アラスカ遠征の準備は中西隊長、坂本さん、増田さん等、諸先輩がどんどん進められ、実現するに至った。まだ外貨持ち出し制限のある時代で、一人５００ドルが限度だった。すべてが倹約、節約の計画で、食料も登山食以外に、滞在用のものを準備していった。

アラスカの登山はexpeditionと呼べるのか

最近のアラスカは景気がいい。特に北極圏の石油をパイプラインで南に引いて、タンカーで本土に出荷している。アンカレッジ、フェアバンクス間のハイウェイもすっかり整備された。町のディスカウントショップも本土と何も変わらず、ちょっと値段は高いが、品数も豊富である。アンカレッジの住宅地も一戸建てが沢山建てられ、活気づいている。アラスカ・ハイウェイ沿いの設備も充実してきた。谷から氷河が迫ってくるような、人里離れた山間部で、対向車が１０分も２０分もやって来ないような心細い状況でも、そろそろガス欠かなと思う頃には必ずドライブインがあり、給油、ショッピング、食事、場合によっては宿泊もok、という具合だ。遊覧飛行、釣りのためのログハウスへの飛行など、およそどこにでもアクセスできるようになっている。州全体が国立公園といった感じなのである。岩壁のジャンプを含む平均斜度５０度の冒険スキー大会が氷河の山で開催されたりもする。これらの状況は２５年前からずっと継続的に発展してきている。ある意味ではアラスカの登山はもはやExpeditionといったたぐいのものではないのかもしれない。

しかし、自然の厳しさは今も昔も少しも変わってはいない。Mt.Steele,Mt.Walshの登頂後、ホワイトホースの自宅を訪ねたとき、アルフォード氏(カナダ登山協会)は、「ローガン山郡の登山は明らかにExpeditionである。それなりの準備と覚悟を持って入山すべきだ。」と、安易な冒険的入山に警告を発しておられた。

１９６８年6月２７日。待ちに待ったスキーを着けたビーバー機が、ベースハウス

のクルアネ湖の湖畔に飛来した。しばらく悪天が続いていたので、ドンジェク氷河のベースキャンプに入れずにいた。まずは、バンクーバー峰に入っていた大阪府岳連隊の下山を優先すると言う。やがて氷河の奥から戻ってきた機体からは、シュラフに包まれた２人の遺体が下ろされた。雪崩に巻き込まれて３名が死亡、一人は行方不明のままだという。翌日、同じ機で氷河のベースキャンプに入ったが、遺体を傍に大阪府岳連隊の皆様の見送りを受けるのはなんとも辛い思いであった。アラスカの山は雪崩が怖いと聞いていたが、二三日続く降雪でテントすっかり埋没してしまう程に積もる。この雪が傾斜の緩い斜面でも、滑りやすいのは、乾燥のせいだと言われている。

せっかくアラスカまでやって来てピークに立たずに帰るのは忍びない。サークルでユーコン川と対面し、温泉プールですっかり汗も流した。帰路はFairbanksに引き返し、Delta-Junctionからアラスカレンジの山中を越えてGlennallenに出るルートを選んだ。 Delta-Junctionからアラスカレンジに入る入口に、山群展望台に丁度良い、Donnelly Domeと言う標高９００m程度の独立峰があり、家族で登ることにした。その日は高層に雲があるものの良い天気だった。しかし、東の風が強烈で、ハイウェイを走るMotor Homeのハンドルを取られて速く走れなかった。ドームの取りつきまで車が入れ、風の当たらない西の斜面から頂上を目指した。真っ白なピラミダルなピークが氷河の後退した幅広い川原と幾重にも縞なす灰色の流れの向こうに屹立している壮大な景観を楽しみながらしばらく登った。ブルーベリーが一杯実を付けているブッシュを抜けて稜線に出ると、烈風が襲ってきた。眼鏡が５m先までも吹き飛ばされ、斜面に体ごと叩きつけられてしまう。とても立って歩けるものではない。手を繋いで這うようにして頂上に立った。見るとアラスカレンジの峰々は疾風に雲を水平に蹴散らされ、表面の雪はすっかり剝ぎ落とされて氷壁が剝き出しになっていた。今あの稜線にいたらひとたまりもなく吹き飛ばされてしまうだろう。植村直巳もこの風にやられたのだろう、マッキンリーの頂上付近だと、ジェット気流でもっと強い風が吹くかもしれない。アラスカの山は、雪崩と風、それにヒドンクレバスが怖い。

アラスカではExpeditionの時代は終わっている。しかし、Expeditionの心構えで臨まねばならない状況はなんら変わらず、自然は今もやっぱり偉大なものだ。

スチール峰とウォルシュ峰

アタック

「山のエスプリは絶頂にあり」、第一次ＲＣＣのメンバーであった*藤木九造*の色紙が山岳部の部室に飾ってあった。登山をする者の原点にある登頂意欲はこの言葉に表現されているのではなかろうか。例えば、利根川源流の遡行は遡行そのものが目的で、本流をどこまでも詰めて行くとやがて越後の国境稜線に出る。三度目の正直の八田さんから誘われて、二人で利根川源流の沢登りに出かけた事があったが、氏は盛んに大水上山の存在を私に説いてくれた。なだらかな高山植物と笹に覆われた稜線の高みがこの山であった。目立たないがここからの一滴がやがてあの利根川となり、関東平野を造り太平洋に注がれるのだと思うとなるほどこれが大水上山の名前の由来なのだと納得が出来た。北岳のバットレスの第四尾根を登り、草付きをどんどん登ってゆくと頂上に達する。先程までの緊張したザイルワークの後に、お花畑が延々と続いてやがて絶頂に達する過程は何事にも代え難い満ち足りた気分を提供してくれる。ましてや登頂そのものが目的の海外遠征では絶頂に立つことは重要だ。だれもがアタック隊にえらばれて、頂上に立ちたいはずである。

７月１１日、晴。８時の交信で、我々３名(増田、坂西、井上)はACにアタック食を荷揚げし、アタック隊のサポートに着くこととなった。行動時間がだんだん遅くなり、今日は１０時に起床。出発準備に手間取って、スキーにシールを貼付け、ABCを出発したのは午後１時半だった。丸山尾根の途中まで中西隊長が同行され、ここで別れ、そこから標高差１５０m程の快適な斜面をボーゲンで下られた。スキーはあまり得意ではない隊長だが、昨日の坂西さんの特訓も含めてこの遠征でずいぶん上達された。「この冬は氷ノ山で先生にスキーを教えてもらおう」と、すいすいと下降される先生の後ろ姿をながめながら坂西さんがつぶやいた。１７時半にACに到着し、アタック隊に食料の補給分を渡し、アタック隊は夕食を済ませて午後８時にガスの飛来する広い稜線をスティール峰めざして出発していった。

こうしてスチール峰(Mt.Steele) の第一回目の夜間アタックが坂本さんを登攀隊長にして中園さん、中村さんの三人で決行された。夜間の方が天候が安定していると見たせいであったのか、理由は定かではないのだが、夏の白夜で明るいとは言え、傾斜のきついピラミッドの側稜線など、ルートの開拓にずいぶん時間を取られて、翌１２日の午後風が強まり、第二波のユーコン・ストームの吹雪に見舞われて、頂上に到達できず、ピラミッドの稜線まで引き返してビバークとなった。雪洞を掘って三人が吹雪の通りすぎるのをじっと待つ事になった。サポートの３人はＡＣに滞在する予定ではなかったので、翌１３日は一日中吹雪の中で食料も乏しいままじっと耐えるのみだった。おかゆを一杯とクッキーだけの食料統制で、坂西さんの寂しそうな表情が忘れられない。アタック隊も当然のことながら食料はなく、ひたすらユーコンの女神が機嫌を直すのを待つのみだった。１４日、ようやく天候が回復し、アタック隊の収容に出掛ける。ピラミッドの急斜面をアタック隊がワンアットで下ってくる。中村さんがヒドンクレバスに足を取られて氷の斜面を滑落する。中園さんが何食わぬ様子でザイルを巧みに操って止める。双眼鏡を通して一部始終を固唾を呑んで見守っていたが、アラスカの氷は怖いと思うと同時に、ザイルワークの確実さに感心もする。氷河の体験はこうして実地に身についてゆくものだろう。円満字さんに指摘いただいた「経験のない者だけの危険性云々」は現実のものだった。

７月１８日、第一回目のアタック隊に坂西さんを加えた４人のアタック隊は首尾よくスチール峰の頂上に立った。ABCの上の稜線から双眼鏡で芥子粒ほどのアタック隊の行動の様子を見ていた私は、登頂の知らせのトランシーバーの声に思わず「チクショー」と叫んでしまった。アタック隊員に漏れたのは最年少の隊員として当然のことであり、別に不満があった訳ではない。しかし、登頂成功の喜びとともに、頂上に立てなかった悔しさも心のどこかに潜んでいたのであろう。涙が止めどもなく流れ、「おめでとう、おめでとう」と大声で話しながら、純白な端正なスチール峰の姿を涙で崩しながら眺めていた。この日の日記には、「アタック成功。これでWalshに登れる可能性が出たわけだ。いよいよ我々の番だと思う。」とだけ書いてある。

スチール峰の登頂でゆとりが生まれた隊は、前進キャンプを撤収し、一気にベースキャンプに集結。氷河からの脱出は当然飛行機を頼りにする以外に無い。ベースキャンプのテントの近くに「２５」と大きく数字を雪を踏み固めて書いた。予定通り２５日に回収のフライトを頼むとの意味である。チェックフライトを頼んでいたアプトン氏の飛行機が２０日にやってきて、この字を見て翼をローリングさせ、「I　got you!」とでもいっている風に飛び去っていった。いよいよ下山の段取りもついた。残りの日々を有意義に過ごすことだ。

ベースキャンプの周辺には氷河の右岸にバージン・ピーク（中西先生の命名、ド－

ムの形が美しい）が左岸にウォルシュ峰(Mt.Walsh 4,800m）がある。増田さんと私は、どうしてもウォルシュに登りたかった。中西先生にもどこかピークに登っていただこうと、バージン・ピークのスキー登山に残りの全員が出かけていった後、増田さんと二人でウォルシュ峰の登頂ルートを偵察した。

７月２２日、７時１０分、ベースキャンプを出発。中西隊長の見送りで６人が、早朝のよく締まった雪にアイゼンをきかせて一路、氷河を横断し、ウォルシュ峰の西稜取り付きに向かった。７月も終りに近づき氷河のあちこちに巨大なクレバスが姿を見せ、稜線からは絶えず雪崩が落ちている。空気が益々乾燥して、雪の結晶を巧みに変化させ、丁度角度の低い早朝の日光に照らされ、小さなおはじきのような無数の結晶が七色に輝いている。ダイヤモンド・スノーの出現であった。ベースキャンプの標高が3300m程度だったので、ウォルシュのアタックは約1,500mの登りだ。１６時４５分に頂上に立った。約９時間半の登攀だった。雪稜、雪壁、氷壁と変化に富んだクライミングだった。増田・井上と、坂本・坂西、中園・中村の３つのザイルパーティとなり、前半はずっと増田・井上がルートを開いていった。氷壁にステップを切り、ナイフエッジにトレースを付けてゆく登攀はアルピニスト冥利と言うべきものだった。

スリップとストップ

岩登りや氷雪の山行計画を練っているとき、転落や雪崩、滑落の危険を思い浮かべて眠れなくなってしまうことが皆さんにはないのだろうか。現役の頃はよくそういった恐怖心から翌日の出発から逃れたい気持ちに何度も陥ってしまった。根が臆病なのかもしれない。実際に雪崩に巻き込まれたり、転落した経験は非常に少ないのだが、身の回りで起きた遭難は数が多い。剣岳の南壁でハーケンが抜けてチムニーで転落した時は幸いまだ登り始めで２m程度の高さからすっと落ちて取り付きに戻っただけであった。セカンドの確保の世話にもならずに何食わぬ顔で引き続き登っていった。酒井君と池ノ谷右又奥壁の登攀にかかった時は、崩れた雪渓のブロックが突然動いて、彼が滝壷に落ちたが、なにげなく差し込んだだけのハーケンが効いて彼も私も転落を免れた。白馬の小日向のコルで出会った雪崩も規模が小さくて埋没するには至らなかった。穂高の屏風岩、第一ルンゼの登攀後、スラブでビバークしていた時に夜中に静寂の闇から突然落下してきた頭大の落石は１mほど横のテラスに激突して砕けた破片が体に当たっただけであった。幸運の女神は私を見放してはいなかった様だ。

ウォルシュ峰の頂上は大きな台地になっていた。西稜がその台地の一角から下って来る所は、最大７０度程度の氷のカンテになっていた。トップで登った私は、下りのことを考えてずいぶん大きなステップを刻んで登ったつもりであった。下降開始で、増田さんがまず下り、ザイルをフィックスして４人が下った後に、しんがりで一歩一歩下っていった。毛糸の手袋が凍っており、ピッケルのシャフトを握って体勢を変えようとした途端に手が滑って転倒してしまった。そこから少し段があり、その下は一気に2000m下のサージングを起こしているウォルシュ氷河まで断崖絶壁であった。すばやくストップの体勢を作り、ピックを思い切り氷に当てた所、きれいに止まった。３mのスリップで済み、増田さんの「よっしゃ！」の頼もしい掛け声の確保の世話になるまでもなく大事に至らなかった。氷雪技術が未熟だったせいではあるが、登頂後の気の緩みも否定出来ない。アラスカもヒマラヤも日本の困難なルートも全て、登ることよりも下る方が困難で危険である事をいやと言うほど思い知らされた。それからしばらく氷の斜面を下降する間、体の震えが止まらず、腰が引けてぶさいくな姿を増田さんに見られていたのだが、氏はとても紳士で私をそっとしておいてくださった。

午後１０時３０分、ようやく薄暗くなりかけたドンジェク氷河をアタック成功の充実感と無事に帰還できた安堵感に浸りながらだらだらとベースキャンプに戻ってきた。中西先生の暖かい出迎えを受けて初めての氷河の素晴らしい体験の旅がエピローグに入っていった。平井先生に説かれた事がある。「太った羊になるよりも飢えた狼であれ。」と。遠征に参加した若手がその後たどる道筋を示すよい言葉だと思う。もちろん飢えた狼で戻ったことは言うまでもない。やがて８年後には念願のヒマラヤの処女峰シェルピカンリの頂上に緒方君とともに立つことが出来た。